

第21回 京都市自殺総合対策連絡会 会議録

<主な意見交換>

○本連絡会構成機関について

*事務局より学生団体 SMILE が本連絡会の構成機関として参画することについて説明。

*学生団体 SMILE より、資料1を用いて団体について紹介。

○京都市と全国の自殺の状況について

*事務局より資料1-1及び資料1-2について説明。

・本市の自殺死亡率は、平成27年の16.0Ptから平成28年の12.7Ptと、大きく減少した。平成29年については、長期的に見ると減少傾向ではあるが、平成29年は13.8と少し戻ってしまったという状況である。(事務局)

・学生についてはいかがか。(会長)

・本市においては、人口全体に占める学生の割合が高いということもあり、学生をはじめ、若年層の自殺対策が課題であると考えている。(事務局)

・「くらしとこころの総合相談会(以下「総合相談会」という。)」は、多重債務等の相談で利用されている方が多いように感じる。学生に対する取組はいかがか。(会長)

・総合相談会は、京都大学で実施させていただいたことがあるが、学生の相談はなく、若者にとっての相談のしやすさは、相談場所の問題ではないということが分かった。学生相談を受ける職員への研修は何度か実施しているが、学生相談の体制は、学校によってかなり違う。京都府の事業で、「いのちのリレー講座」という単位互換制度を利用した学生向けの自殺に係る講義を実施しているが、参加者が少なく、どうすれば学生に取組が届くのかを考えなければならない。(事務局)

・遺族の会では、若い子どもを自殺で亡くされた母親の参加が多い。今年度は、若年層の遺族を対象とした会を開催した。親を亡くすと、自分の将来について、親身に話を聞いてもらえないという声が上がっていた。ライフリンクが2012年に実施した遺族調査では、若者の自殺の原因は進路の悩みが多かった。今の若者の悩みと変わらないように感じる。若者が進路について悩んだ時に、親身になって相談にのってくれる場所が少ないのではないか。(こころのカフェきょうと)

・大学生の年代でも学生でない方、大学生でも30歳代以上の方、学生でも通学している方、ひきこもりの方等状況は様々である。若者、学生の中でもどのような方に自殺リスクが高いのか分かった方が対策を講じやすいのではないか。(京都弁護士会)

・個別の事例へのアプローチについては、個人情報保護の観点から、情報の共有が難しい。(会長)

・目的外使用に当たるため、死亡小票を調査できない。また、警察庁統計では遺書等が活用されているが、自殺の原因は何だったのかを遺書から明確に判断することは難しい。また、遺族への調査も、遺族に対する負担等を考えるとなかなか難しい現状であると聞いている。(事務局)

○本連絡会構成機関等による自殺対策の取組について

*事務局より資料3-1, 3-2, 3-3について説明。

・高知県には自死遺族の「ひだまりの会」というピアサポート活動を行う団体がある。自殺が起こった時に、同団体スタッフと地域の保健師と一緒に自死遺族のもとに家庭訪問し、今後の手続等を支援しつつ、悩みを聞き、一緒に問題解決をしていく。(こころのカフェきょうと)

- ・参考にさせていただく。(事務局)
- ・京都市の自殺対策をみていると、勤労者世代への取組が薄いように感じる。相談に来られた方や産業医に対しての取組はされているが、こちらから直接的に勤労者にアクションを起こしたり、事業者に対して啓発をする等の対策を考える必要がありそうな印象を受けた。(京都司法書士会)
- ・過去に、産業保健センターに御協力いただき、企業に対する啓発を実施したが、市内は企業が多く、企業の把握が難しかった。また、多くの企業に対してどのように伝えればよいのかという困難さもある。(事務局)
- ・主管課の新規取組として、インターネットによる情報発信を新規で取り組まれるのか。(会長)
- ・インターネット上で、「自殺」や「死にたい」等の設定したキーワードをつぶやいたり検索した方に対して、検索結果に広告を配信し、相談窓口を表示するという取組である。京都府でも同様の取組を実施されており、本市を含めた京都府下でキーワードをつぶやいたり検索した場合、京都府自殺ストップセンターの広告が表示される。(事務局)
- ・学生団体 SMILE については、今回から新たに連絡会の構成機関として参画いただいているため、資料3-1に取組を記載していない。活動について御説明いただきたい。(会長)
- *学生団体 SMILE より追加資料1に沿って説明。
- ・メンバー数は10名程度で、大学は主に京都大学、立命館大学、関西大学である。また、事業を提供している高校生のメンバーは20名程度いる。現在のように4つの事業を行う形態になったのは昨年度からであるが、団体自体は4年前から活動している。(学生団体 SMILE)
- ・今の若者はメールや FaceBook をあまり利用しないと聞く。コミュニケーションツールとしては、やはり LINE が主流なのか。SNS と言っても様々な種類があり、どの自分を表現したいかで区別して利用していると聞く。(会長)
- ・メールはフォーマルなものとして認識している。FaceBook は自分よりも目上の方とのつながりを保つために利用していることが多い。友人とやりとりする際のツールとしては、LINE や Twitter, Instagram 等が主である。SNS の中でも特に Twitter に顕著だと思うが、普段関わることのない人でも、Twitter の中なら関わったり、普段話さないことでも、Twitter の中なら衝動的に発信できたりする。たまにその蓄積で人間関係が崩れ、自己嫌悪に陥ることがある。(学生団体 SMILE)
- ・普段話さないことでもポロッと出てしまうというのは、人間関係が築けているからこそできることであるという認識だが、Twitter をはじめとした SNS の中では、普段関わりのない人に対して、普段話せないことが話せてしまうのか。(会長)
- ・自分が分からなくなると、衝動的に話せてしまうのではないだろうか。(学生団体 SMILE)

○若年層への自殺対策について

- *事務局より、資料4-1, 4-2, 4-3及び4-4に沿って説明。
- *京都市教育委員会生徒指導課より追加資料2に沿って説明。
- ・STOPit とは、悩み相談に対応することに特化して開発された、スマートフォンから無料でダウンロードできるアプリである。本市においては、全ての京都市立高等学校の全日制、定時制に在籍する高校生に対して、学校を通じてパスワードを配布し、高校生にアプリをダウンロードしてもらい、パスワードを使って相談アプリを利用してもらう。STOPit は、LINE のような文面上の対話形式の相談機能と、自分や友人がいじめ等を受けた時に対話せずに通報できる機能、ワンタッチで京都市の相談窓口につながる緊急通報機能の3つの機能がある。利用可能な時間は17

時から22時までとし、学校にいたことが想定される時間帯や、スマートフォンの利用が夜遅くならないように制限をかけているが、開設期間中は毎日利用可能。(京都市教育委員会生徒指導課)

- ・高校生にとっては、なかなか自分から相談窓口に繋がりにくい。何かあった時に、手元にあるスマートフォンですぐに相談ができるのは良いことだと思う。(学生団体 SMILE)
- ・いじめの通報があった場合、直接的支援は実施されるのか。また、通報した内容が本当なのかどうかを、どのように判断されるのか。(京都自死・自殺相談センター)
- ・発信者が匿名であれば、個人は特定できない。しかし、場合によっては解決できるよう直接的な支援を行う。通報の内容が本当なのかは、相談員が見極めて判断することになる。相談員は経験豊富な臨床心理士等を配置し、一人の相談に複数の相談員が対応するという体制を取る。SNSによる文面の相談だけでは情報量が少なく、判断が困難であるため、文面での相談を受けつつ、できるだけ電話や面接等の相談につなげたいという考えである。(京都市教育委員会生徒指導課)
- ・相談員の聞く技術の重要性を改めて感じた。(京都自死・自殺相談センター)
- ・今日相談した学生が、3日後に再び相談した場合、同じ相談者だと認識できるのか。(会長)
- ・3日後であっても同じ相談者であると認識し、これまでの相談経過を踏まえて相談にのることができる。しかし、相談者がアプリを消去した場合は、同じ相談者が再度相談しても、別の相談者として認識する。相談履歴が消去されることには、相談のしやすさや、SNS上の情報管理の面でメリットがある。本市の場合は、相談してから一定期間を超過すると、相談履歴を削除していくことを考えている。(京都市教育委員会生徒指導課)
- ・相談履歴は貴重な情報である。個人情報は大切に扱いつつ、活用については議論していただきたい。(会長)
- ・資料4-4に、SNSでの相談者は男性よりも女性が多いとある。「わかち合いの会」の参加者も、女性が8割である。男性が相談しやすい社会になってほしい。(こころのカフェきょうと)
- ・これまで、女性が社会の中で不利益を被ってきたことが「女性問題」として議論されてきた経過があるが、男性が本音を出せないという点についてはあまり議論が深まっていない。(会長)
- ・うつ病は女性に多く、自殺は男性に多い傾向がある。男女でなぜうつ病の疾病率に差が出るのかは、男性の受診率の低さや、衝動性の高さ等でバイアスがかかっていると考えられる。世界的に見ると、日本の女性の自殺率は高い。高学歴や、社会的地位の高い女性は、自分の置かれた立場上、相談しにくいという思いがあり、自殺率が高くなると考えられる。(事務局)
- ・女性は悩みが浅いうちに相談でき、悩みが解決に向かうことが多い。一方、男性は、悩みが深刻になるまで相談できず、悩み事が複雑になっていることが多く、解決も難しい。恐らく、SNSの利用者自体も女性の方が多いのではないだろうか。若年層の自殺対策としてSNSを活用するという考えは分かるが、男女で同様に有効な対策であるのかどうかは疑問がある。(京都府医師会)
- ・女性と男性ではストレスを感じた時の行動パターンに大きな違いがある。悩みが小さいうちに相談でき、発散できる対策が必要である。(事務局)
- ・亀岡市では、男性が定期的に利用する床屋を対象にゲートキーパー研修を実施するという考えで、理美容協会に向けたゲートキーパー研修を実施している。(京都司法書士会)
- ・いのちの電話に相談される方は、男女でおよそ半数ずつである。ただ、言葉数が多いのは、圧倒的に女性である。男性の共感力は昔より格段に高くなっており、相談員の教育は男女同じトーンでできるようになった。(京都いのちの電話)